
通史：半世紀のあゆみ

青春のパライストラ

現役諸君に望む

編集部

1. あえて現役諸君に望む

昭和56年の春のリーグ戦は、6月26日から28日の間、大阪府立体育館（別館）で開催された。その数日前の6月22日に正式に「OB会」の承認を得て、指導陣を一新することになった。

部長 高堂 俊彌（商学部教授）
総監督 伴 義孝（昭和38年卒）
監督 藤田 裕充（昭和43年卒）
コーチ 佐藤 秀雄（昭和42年卒）
コーチ 横山 博行（昭和56年卒）

これまで学外コーチとして尽力してくれた日本体育大学卒の藤浦義隆（名誉会員）コーチも勇退することになった。この「指導陣一新」とその「布陣」については、昨年度来、当事者とOB会幹部間において了解されていて、さらに昭和56年度の当初からすべての準備を完了していたので、藤田新監督の心構えをも含めて、万事の手抜かりはなかった。一新の理由は、大学改革問題に携わることになる、伴前監督の本務専心が主たる要因ではあったが、「一進一退」ムードを払拭するために

も、前年度までの指導陣から自発的に提案されたことによる。ここに藤田新監督の「あえて現役諸君に望む」という一文がある。

◇

レスリングというスポーツは個人の格闘技でありながら、ことリーグ戦ともなると不思議な様相を呈してくる。それは各大学対抗というひとつの「名誉意識」が選手間に漂うせいでもある。

我が関大レスリング部が一時崩壊の危機に陥ったときに、伴総監督の努力によって、魂が選手の心呼び起こし一人ひとりに乗り移り、今日のレスリング部躍進の基礎が育成されたのである。

その土台の上に大きな「家」を建てるか、そのままに放置するのか、どのような家を建てるのかは、いま監督を引き継いだ私の責任である。しかし選手諸君に理解してほしいことは、闘うのは選手個人個人である、ということである。我が関大カイザー魂が息を吹き返すのも、選手同志の相互理解、自主性、扶助精神、友情がひとつの連帯感となって働いてこそ結実するのだが、より大きな発展を遂げるために、それは不可欠なことである。

それを現役選手諸君には、身体で、体現してもらいたい。大学の4年間は、長くて短い、短くて

長い「生活」のなかで、一年一年を同じことの繰り返しを続けることになる。諸君には、その意義を、大切にしてほしい。

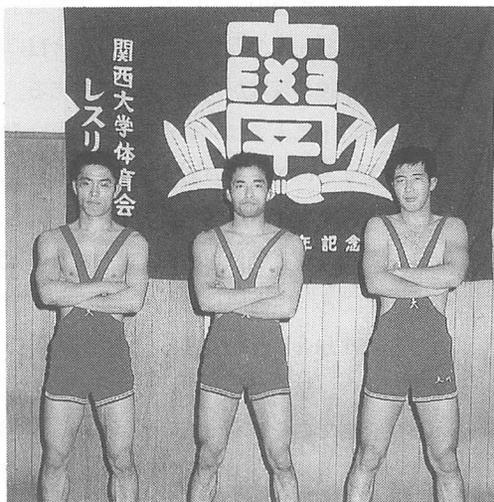
いま伝統ある関大レスリング部に、新しい「歴史」を作るのは、現役選手である。赤井、佐藤、三宅、竹之内、大川、山本、今永、加藤、田中、西台、関口、西尾、高田、鷹巣の諸君であるということを忘れないでほしい。

いついかなるときも、監督、OBたちは、諸君の水先案内となるであろう。OBたちは君達の土台であることを忘れるな。選手個人個人の奮起を望む。いま新たに社会に巣立っていく亀田、西山、奥部君。4年間ごころうさん。頑張れ。

(藤田裕充所感・「OB会誌」)



藤田新監督は、その年の総括に、次年度を期して上記の所感を現役へのメッセージとして残してくれた。「何か」を見つけ出すことを、あえて、現役諸君の問題として捉えてほしい。この主題が、一貫した、当時に関わったすべての指導陣の「望む」ことであった。



写真▷昭和56年の「みんな頑張ってます」

2. 昭和56年(1981)・藤田監督発進

風俗・流行・歌 校内暴力・クリスタル
族/漫オブーム/♪『ルビーの指輪』

この年の「報告」については、亀田雅彦主将の手記を、そのままに引いておきたい。



昭和56年度は、7人の新入部員を得て、総勢18名で1年間クラブ活動を行ってきました。人員には不足がなかったものの、重量級3階級が不在で昨年度と比較して戦力の低下は著しいものがあつたと思います。そのため、「今年は他部からは一人も借りない」つもりだったのですが、妥協を余儀なくされ、春秋とも柔道部の世話になりました。私個人としては全階級揃えることができなくても、多少順位が下がっても、他部からの調達はできるだけ避けるべきだと今でも思っています。

6月26日からの春季リーグ戦では、その1週間程前に行われた関関戦で惜敗したこともあって、現状(2部3位)維持が困難かとの下馬評もあり、私自身も優勝の可能性は1割もないと予想していました。ところがフタをあけてみると、神大、広修大をまったく寄せつけず、宿敵関学にも「5-4」で勝ち、直前の関関戦の鬱憤も晴らすことができました。そして、最終日の対桃山大戦では、全勝同士の激突となりました。

田中、奥部、私、赤井が勝ったものの、5点目がなかなかとれなく、勝負は9人目まで持ち越され、副将の西山にすべてを託すことになりました。自他ともに認める「気の弱いボンボン」の彼はもしも負ければ、〇〇先輩に、半殺しの目に合わされるのではないかと心配からか、顔面蒼白で足には震えがきていたようです。しかしコーションをとられ、失格寸前までいきながらも、「攻める

な。タックルなんか入っちゃダメだ。」とのセコンドの指示をよく守って、「3-0」で逃げきり、なんとか「5-4」で、桃山大に勝つことができました。そして名城大との優勝決定戦も「6-3」でものにし、大方の予想を覆して、関大が2部で優勝してしまいました。

私たち4年生は、密かに野望を抱いてはいましたが、秋季リーグ戦での優勝を義務づけるがごとき、この異常事態を目の当たりにしてみると、「エライことしてもうた」とただひたすら後悔を抱くのみでした。

そして11月27日からの秋季リーグ戦も春とほぼ同じ経過をたどり、最終日にまたしても、桃山大と対戦することになりましたが、今度は「4-5」で敗れ、2部3位に終わりました。

春のリーグ戦以後、「秋に優勝だけへんかったら、春の優勝も、この1年の努力も、すべてが水泡に帰すことになるで」と常々4年生3人でケツを叩き合っって懸命に努力し続けたつもりでしたが、結果は、無残なものでした。部員のなかには泣く者も数名いましたが、私たち4年生は、諸先輩、ことに忙しい仕事の合間をぬって献身的と思えるほど熱心に我々の練習の面倒をみてくださった、藤田新監督と横山新コーチに対して、申し訳ない思いで一杯でした。種々の敗因が考えられますが、最終的には、「根性負け」だったと思います。練習がまだまだ足りないことの証であったと思います。

以上のようにリーグ戦では2部3位からまったく進歩がありませんでしたが、秋季リーグ戦での惜敗に際し、春季の入れ替え戦完敗のときの数十倍の悔しさを、各自が感じとってくれたようなので、それだけでもこの1年は無駄ではなかったのではないかと、奥部主務が申しておりました。

また春季新人戦でメダル獲得数が「0」であったのに、秋季には「5個」とれたことから明らか

かなように、みな確実に強くなってきていることだし、次季の2部他校の戦力低下は必至と思われるので、次の春季リーグ戦での優勝は容易なことだ、と西山副将が申しております。

しかし藤田監督が言われるとおり、目標はあくまで「1部優勝」です。各人が志を高く持ち、自分のレスリングに対する明確な問題意識を常に持ちつつ、赤井主将の指揮のもとに、日々の練習に励むならば、必ずや良い結果がでると思います。

(亀田雅彦手記・「OB会誌」)



写真▷昭和56年「合同慰霊祭」・関大体育館

この年「OB会」では、11月1日に関西大学「体育館」で、「合同慰霊祭」を挙行している。4月16日名誉会員の松葉徳三郎氏が逝去された。松葉氏は、戦前的大阪で、レスリング発祥に一役買った関大生え抜きの「万能スポーツマン」だった。戦前松葉氏はYMCA体育主事として、大阪YMCAで、敏腕をふるっていた。若いときのアメリカ留学時に修得したさまざまなスポーツ知識を大いに、日本で、広めていた。そうした経緯で、戦前的大阪で、大日本レスリング協会関西支部を設立するために尽力され、その松葉氏の影響で、関大関係者がレスリングに関与するようになってい

る。その一人に、松井清が、存在していた。いわば、松葉徳三郎は、大阪でのレスリング発祥の草分けの一人であった。

合同慰霊祭は、そうした以下の方々への生前の活躍・奉仕に対して敬意を表すために企画された。

故 小田原徳善（名誉会員）
 故 松葉徳三郎（名誉会員）
 故 木村 篤一（名誉会員）
 故 松本 六理（昭和13年卒）
 故 山本 雅之（昭和25年卒）
 故 安川 健次（昭和28年卒）
 故 白水 陽（昭和32年卒）
 故 貢 隆（昭和33年卒）
 故 村山 栄治（昭和40年卒）

慰霊祭は次のように執り行われた。



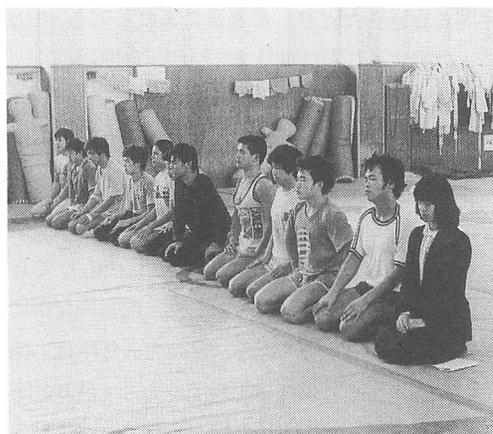
慰霊祭は、遺族、OB会員、現役多数の列席のもと体育館で挙行されました。まず霊前にてOB会員と現役による「紅白戦」が奉納されました。つづいて金輪秀隆（昭和32年卒）導師による厳粛な読経のなか、溝畑会長より祭祀・祭文が、亀田主将より追悼の辞が、朗読され、つぎつぎに香をささげ故人の霊を慰めました。（「OB会誌」）

3. 昭和57年（1982）・単独合宿

風俗・流行・歌 日本語ワープロ時代／
 言葉「ルンルン」／♪『北酒場』

この年の「夏」の合宿は、8月10日から22日の間、枚方市の「中村柔道場」で、関大単独で実施した。この夏季単独合宿は、大学紛争後、初めての試みである。それまでは、春季合宿は別にして、

「部員不足」や「実力不足」などの関係で、特定高校の道場を借りての高校生との合同合宿や、特定大学の胸を借りる合同合宿を繰り返してきた。いわば恒例の夏季合宿という年間行事さえも、独立して経営する「実力」を、いまだ持ちえなかったことになる。その意味では、関大レスリング部にとって、なるほど関大のキャンパスには「大学紛争後遺症」がこの時点になっても殺伐と残存してはいたのだが、いまだ大いにその「反動」がつきまわっていたことになる。その大学紛争「反動」からの脱却の必要性を指摘したのは、前年の、亀田・西山・奥部体制であった。



写真▷関大恒例の練習直後の黙想

- ▷ 「多少順位が下がっても他部からの調達は避けるべきだ。」（亀田雅彦「反省談」）
- ▷ 「名古屋での慶応大、名商大との合同合宿……。各自の感じ方次第だが、あまり充実していたとはいえまい。来年の夏合宿は、より実りあるものに工夫したい。」（奥部真二「反省談」）

これまでは仕方がなかった。しかしこの頃にもなると、「意志」が芽生えてきた。助っ人なしでリーグ戦を闘いたい。合宿には自前の独自色を出したい。この「関大意識」は、本物である。新「関

大精神」が、ようやくにして大学紛争後、新「独立心」を勝ち取ることになったのである。この空気を醸成し、培養するために、藤田監督を筆頭に、指導陣が集まって、打開策を練り上げることにした。そして単独実行のためには、「適切な施設」と「資金」が必要だ。助け船を出してくれた人物がいる。溝畑武夫OB会長である。溝畑会長は不動産業を営んでいた。ちょうど枚方市の星ヶ丘町に物件の「空き文化住宅」があった。商売の物件である。その使用を「宿舎」のために提供してくれることになった。一切の光熱費など必需品を含めての無料提供である。「文化住宅一棟」まるごとの提供である。「練習場」も、溝畑会長の斡旋で、枚方の「中村武道館」を借り受けることに決まった。これで「宿舎」と「練習場」は確保できた。しかもすべて無料である。

幹部部員と指導陣とが頭をならべて、合宿運営法の策を練った。こんな場合、やはりのことに、「伝統」がすぐに役立つ。

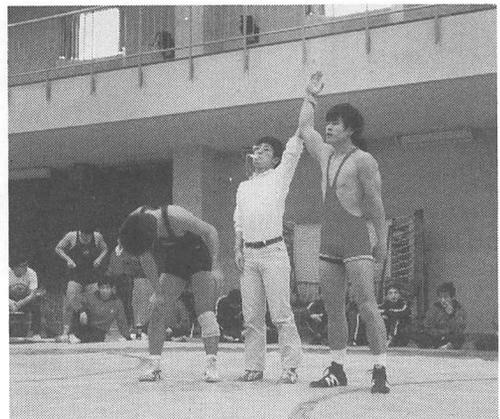
- ▷ 昭和26年：打倒関学を目指し、「15日間」の長期春季合宿を行っている。炊事班と買い出し班も編成する「自炊」合宿である。
- ▷ 昭和37年：この春12名の卒業生を送り出しチーム力が激減したこともあって、秋のリーグ戦前に「45日間」にわたる超長期合宿を行った。経費削減のため自炊で、……合宿期間中はもちろん勉強にも精をだした。

まだまだ実例はある。関大レスリング部史をひもとけば、「ここ一番というとき」には、部員の「意志」が「何か」を生み出していることが手にとるようになる。その「気概」が、関大の歴史を、作ってきたのだ。そんなエピソードの内実を、この頃の部員は、ちょっとしたヒントを与えさえすれば、理解できるようになっていた。この大学紛争後初の「関大単独夏季合宿」も、衆議一決で、「自炊合宿」に決まった。

◇

……（春のリーグ戦は）2部4位という最悪の結果を残してしまった。全員が悔しい思いをし、「秋のリーグには…」と優勝、1部昇格を誓って夏の合宿（名付けて「星が丘の青春」）に突入した。監督、コーチ、OBの先輩方の協力で2週間自炊の生活に入った。朝早くから公園でトレーニング（レンガを持って走ったのは忘れられない思い出になりそうだ。）をし、くたくたになった体で朝食を作る。一服するとスパリングが待っている。汗でマットがすべる。重い足をひきずって帰ると今度は夕食の準備だ。料理がみな上手なのは驚いた。2、3の例外を除いては。この合宿で部の「和」ができ、体力もついた。その成果が新人戦に顕れ、好成績を残した。そして最後のイベント「リーグ戦」だ。決勝戦のマットはすでに興奮の坩堝である。選手のプレッシャーは並大抵のものではない。足の震えもマットに上がれば止まってしまう。闘うしかないのだ。「4対3」で迎えた8戦目に判定で勝負がついた。負けである。だが応援はなりやまない。悔しさを手拍子にかえて、「ガンバレ関大」「勝つぞ関大」。（佐藤隆子手記「関大体育会誌」）

◇



写真▷合宿の成果が出てきました

この引用は女性の「文」である。佐藤隆子マネージャーが書き残してくれていた。すべてに臨場感と熱気がある。「女性」と書いたのは蔑視してのことではない。彼女の冷静な観察眼が、「何か」を、「手応え」を、自ら掴んだ結果のことだった。この「単独自炊合宿」は確かに「何か」を残してくれた。その結果が次の年に顕著に出てくる。

4. 昭和58年（1983）・1部3位に

風俗・流行・歌 宅配便・勝手連／エア
ロビクス／♪『矢切の渡し』

結果が出た。単独自炊合宿の成果だ。この秋「1部リーグ・第3位」を勝ち取ることができたのである。待ちに待った「結果」だ。さらにすべてにわたって多彩な年だった。「OB会誌」の巻頭言に訊ねてみたい。



写真▷昭和58年度は「個人戦でも活躍」



昭和58年度の関西大学レスリング部OB会の一般活動であります。昭和58年度の前期は、日本

経済も3年間におよぶ「冷え込み」のために、OB諸兄も、仕事の面で種々ご苦労なされたことと拝察いたします。また昭和58年度の日本列島は、選挙にあげ、選挙にくれた年でもありましたし、全国的に記録的な大雪に見舞われあらゆる面で大変な年でありました。

しかしながら関西大学レスリング部OB会の活動は、OB諸兄の強い絆で結ばれ、関西大学体育OB会内でも、より堅固な一枚岩の団結の強い団体であることが、周知の事実となって認められております。

かたや58年6月25日の日本レスリング協会における「新人事」で、我々OB会のシンボルである松井代表が日本レスリング協会の副会長に、関大レスリング部顧問の村田恒太郎氏が（日本協会）理事長に、伴総監督が（日本協会）審判委員長に就任されました。これら以外にも、近畿レスリング協会や西日本学生レスリング連盟や、また各県レスリング協会でも、関大レスリング部のOBが主要ポストをしめられておられます。これらのことを通じ、関大レスリング部OB会の伝統の重みと深さを、感じる次第です。

さて58年度の西日本学生レスリング連盟春季リーグ戦で優勝して1部復帰しましたが、我が部が、15年ぶりに秋のリーグ戦で、3位に上昇いたしました。これは、昭和46年春（1部）第6位となって2部へ転落し学園紛争などにより廃部寸前に追い込まれて以来の成績です。（注：その間1部復帰は何回も繰り返しているが、常にテールエンドに甘んじていた。）これは、ひとえに伴総監督、藤田監督、佐藤コーチ、横山コーチなどの自分の仕事を投げうっての母校現役に対する情熱のたまものであり、我々関大レスリング部OB一同深く感謝を申し上げる次第であります。

最後になりましたが、58年4月15日に、日本レスリングの創始者であり、日本レスリング発展の

代表者でありました、八田一朗会長が亡くなられましたことは、我々レスリング関係者にとりまして残念ではありますが、その意志をついで行きたいと思う次第です。ここに心よりご冥福をお祈りいたします……。(「OB会誌」)

◇

多彩な年ではあったが、やはり、我がレスリング部に絞っての概括が必要だろう。藤田裕充監督の所感(昭和59年春の記)を引いておきたい。

◇

我らがレスリング部の上にも輝かしい春が訪れようとしているのか。関西大学体育会のあまたある「運動部」のなかでも、30数年の歴史と伝統ある我々レスリング部も、あの苦悩の学園紛争に巻き込まれ、苦難の15年という長い年月が過ぎ去ったが、いまここに不死鳥のごとく、声高らかに胸を張って、関西大学レスリング部ここにありと、その雄姿を日本全国にいや世界に向けて羽ばたこうとしている。

部員が1名という「時」から思えば夢のようであるが、これが本来の部の姿である。単独合宿を2年前(昭和57年度)枚方の地で2週間、1年生から4年生までが、練習から自炊までやり遂げることができ、部員たちの意識革命に一つの転換がなされたことと思う。その結果が、去年(昭和58年度)春の「2部優勝」に証明されたと自負している。

もちろん格闘技である以上勝つための練習、鍛錬をしなければならぬし、選手であるかぎり、スポーツの最高峰であるオリンピックを目指して頑張ってほしいものであるが、それとともに、大学生活4年間のレスリングを通じて、技から技へ、友情から友情へ、当意即妙に、臨機応変に、対処していける「精神と肉体」を養ってくれたら幸いである。そして去年夏には、四国徳島で合宿をしたときに、「部」本来の基本が戻ってきたと確信

することもできた。そして秋のリーグ戦。しかし運が無かったか、天が我らを見はなしたのか、惜しくも1部優勝を逃して、3位にとどまった。だがここで3位が確定したときに、喜んでいいはずの我が部の部員たちが、優勝できなかった悔しさに涙を流したその光景にふれて、確信がさらに膨らんだ。彼らの顔は、次の飛躍の実現を、約束してくれていた。各自の心のなかで、この悔し涙を覚えていて、これからの練習に丸となってくれさえすれば、関大レスリング部は、永遠に我らの誇りとなることであろう。(「OB会誌」)

5. 昭和59年(1984)・実力発揮

風俗・流行・歌 じゃばゆきさん/衛星
放送登場/♪『涙のリクエスト』

この年の1部校を、春季リーグ戦の順位どおり並べれば、次のようになる。

優勝	徳山大	4勝1敗
第2位	同大	3勝2敗
第3位	福岡大	3勝2敗
第4位	近大	3勝2敗
第5位	関大	2勝3敗
第6位	大体大	0勝5敗

上記の6大学のうち、「スポーツ推薦」の入学制度のない大学は関西大学だけである。この年には秋にも関大が1部リーグ第5位を確保している。いわば「実力」でものにした「第5位」ではある。春の接戦はまさに6大学の実力接近ぶりを示している。関大の2勝は、この頃の常勝校「福岡大学」を「5-4」で破ったのもので、称賛に値する。他の1勝は、対大阪体育大学戦によるも

のだが、そのスコアは「8-1」で、関大の圧勝だった。負けた3敗は、「同大⑥-3関大」「徳山大⑤-4関大」「近大⑤-4関大」と僅差だった。その9割9分までが大学からレスリングを始めた「素人集団」がこの戦績を残すのは容易ではない。その奮闘ぶりを、主将の関口勉の手記に、訊ねておきたい。



写真▷昭和59年「充実したチームでした」



昨年度、台風の日として1部復帰、3位入賞と、それこそ波瀾を巻き起こした我が関大レスリング部は、今年度当初、優勝候補と評価され、また自分たちも過去の栄冠奪回のチャンスと、リーグ戦に臨みましたが、しかしながら、蓋を開けてみると、序盤から得点として数えていた近大に敗れ、足並み崩れ、大体大と福岡大を破ったものの、結局1部5位に終わりました。まったくワンポイントの「差」というもので、その差が優勝を狙うか、5位に落ちるかを分けるものでした。毎日の練習や辛かった合宿も「このワンポイントを取るためのものだった」と思うと、いまでも、悔しさがこみあげてきます。

昨年度に引き続き、徳島阿波池田での合宿を経

て、秋季リーグ戦に臨みましたが、春の雪辱ならず、またしても5位に終わりました。近大に最終戦で1勝して、「1勝4敗」の同じ勝ち点ということで「フォール数勝ち」の辛勝となり、入れ替え戦に出ずにすみ、1部に、「首の皮一枚」で残ったという感じでした。

最終戦まで連敗で、桃山大戦の終わったミーティングのとき、ある幹部の者が、「いい試合だった、で終わるのは、もうたくさんだ」「いい試合でも勝たなければ何もならん」と言ってましたが、まったくそのとおりで、勝負というものは、とにかく勝たなければならない。勝たなければ、「負け」しか残らない。この当たり前のようではあるが、厳しい定理を、身をもって、いまさらのように知らされたものでした。

これらの悔しさと反省は、新2回生から4回生までの部員には、判っているものと思います。だから、あとは、沖本以下の現役一同に、我々のこの思いを託して、真の関大の姿「強い関大」を、再び見られることを信じています。

最後の年のリーグ戦は、こうして不本意なもので終わりました。しかし、この関大レスリング部に、所属しての4年間で得られたものは甚大であって、その日々と、それを過ごした仲間は、私にとってはどんな「金メダル」にも変えがたいものであります。

我々今年度の「現役」卒業生は、揃いもそろって、およそ口は悪いし、頑固だし、負けず嫌いで、OB諸先輩方にも、失礼のあったことと思います。だがそんな性格があったからこそ、結果的に、互いに鞭打ちあってこられたものと思います。多分、そのような性格と関係は、これからも変わらないだろうけれど、亀田、鷹巣、高田、田中、西尾、西台、本多と、練習し、ともに闘った日々は、一生忘れることはないでしょう。

結果的に私たちが残していくものは「1部定着」

というところにとどまりました。しかし3回生のとき、我々も主力として出場し、1回生の頃からの悲願「1部復帰」を達成したときは、本当に感激しました。ほとんどがレスリング未経験者である我々は、1回生のころ、「1部」の選手の試合を、憧れの感をもって見ていたものです。そんな素人集団の関大が、高校時代からの経験者と渡り合えるまでにいたったことは、我々の誇りであると同時に、大きな自信となりました。(関口勉手記「OB会誌」)



大学紛争以後の低迷期では、昭和53年(1978)から、この年(1984)の間が、最も充実していた時期であった。その最大原因は常々20名を越える「部員数」にあった。だがこの昭和59年度を境にして、またもや部員不足の時代が続くことになる。その「前触れ」には既にこの年の4回生が気づいていたようである。



さて今後の我が関大レスリング部ですが、前途に明るいものが見えているとは決して言いかたいと思います。1部昇格そして1部3位の原動力であった、4回生が、卒業してしまうのです。いまの状態では1部残留も決して楽ではありません。

現役諸君を見渡しても2部に落ちるという危機感がなく、練習に対する各個人の取り組み方にしても、他人任せのところだらけで、積極性に欠けています。試合においても、負けることに対する悔しさを感じられない選手が、下級生の大半を占め、まるで他人が試合をやっているようにさえ思われます。

レスリングとは個人競技であり、格闘技なのです。勝つのも負けるのも、自分次第で、どうにでもなります。ですから練習においても試合においても、もっと緊迫感をもち、闘志を剥き出しにして、相手に負けるということに対する悔しさをも

ち、勝つことに食欲に取り組んでほしい。

とは言っても、我々4回生も、他人に対して偉そうに言えるようなことはしていないのですが、現在の1部と2部上位校のなかでは、関大レスリング部だけが未経験者の集まりであり、素人集団であるにもかかわらず、1部へ昇格し、また1部3位にもなったことに対して、我々4回生は自信と誇りをもっています。(「OB会誌」)



写真▷昭和59年「合宿で張り切ってます」

上記の引用は「今後の関大レスリング部に望むもの」と題する1984年度「4回生一同」の下級生に対する叱咤激励の率直な声である。いかなる状況下においても、「誇り」と「やる気」をもって取り組めば、道は、開けるというメッセージである。このころ指導陣も、再び、部員獲得の困難状況を迫りつつあることを察知していた。その対処を講じなければならない。指導陣は、関西大学第一高等学校の、「レスリング部」復活を狙って、さまざまな働きかけをしてはいた。その戦略のいかあって、「一高」に、個人的な同好のレスラー4名を育てることに成功していた。この機会を捉えて、「関西大学第一高等学校レスリング部OB会」を我が関大レスリングOBの「一高出身者」

で結成することになった。そして結成を発条にして、同校の、「レスリング部復活」運動に向けて動きかけることになったのである。その経緯についても後述することになる。

1984年はロサンゼルス五輪の年だが、その五輪で、OB関係も「関大」の実力を発揮している。

▷ 村田恒太郎（名誉会員）：日本チーム団長

▷ 市口 政光（S37年卒）：グレコ監督

▷ 伴 義孝（S38年卒）：日本代表審判員

さらに、当時全日本学生レスリング連盟の会長を務めていた、松井清名誉会長が「第1回全日本学生チャンピオン米国遠征チーム団長」になっている。すべてに勢いのあった年だった。

6. 昭和60年（1985）・慶事相次ぐが

風俗・流行・歌 マネー・ブーム／言葉
「イッキ・イッキ」／♪『ミ・アモーレ』

昭和60年度には「慶事」が相次いだ。そのうちの二つについては、「OB会誌」の巻頭言に記されている。



写真▷昭和60年の「張り切ってます」

◇

……その一つは、昭和61年3月12日の関西大学体育OB会総会で、我々のシンボルであります松井名誉会長が、第5代目の関西大学体育OB会の会長に就任なされましたことが第1の大きな喜びであります。いまさら松井会長のお人柄を紹介するまでもありませんが、松井名誉会長は、故大島謙吉OB会長（昭和60年3月30日逝去）のあと、会長代行をしておられました。総会で正式な会長に就任された次第であります……。

2番目の喜びですが、我が関西大学レスリングOBの押立吉男氏（昭和28年卒）がFILA（国際レスリング連盟）より「功労賞」を受賞されたことが特筆されます……。

◇

6月5日、「関西大学レスリング部OB会総会」が開催された。その第2部で「押立吉男氏受賞祝賀会」が開催されている。

もう一つの慶事は「関大一高レスリング部」復活の兆しである。そのための促進効果を演出するために、レスリングOB会の主催で、ある行事が行われている。11月5日のことである。これも「OB会誌」に記録されている。

◇

昨年度からの我々の悲願であった関大一高にレスリング部を復活させる兆しが見えたとの伴総監督から連絡を受け、急なことでありましたが下記7人のOB（松井名誉会長・清谷利次・横山勝利・宇賀大三郎・伴義孝・石井正樹・藤田裕充）で関大一高の校長・事務局長・教頭・生活指導部主任の4人の先生方をお迎え、伴総監督の司会で懇親会を開催しました。関大一高のレスリング部は、往時は名選手を輩出し、すばらしい活躍をしていたのですが、昭和40年後半からレスリング部に部員がいなくなったために、一応休部という形になっていることが判明しました。新たに部

を復活させるためには、まずレスリング同好会の形で発足し、ある程度の人数が揃ったところで、部に昇格させることが順序であるとの説明は、生活指導部主任の先生からご指導を頂きました……。

◇

その記録は、「なにとぞ、関大一高OB諸兄には、関大レスリング部を強くするために、母校の高校で一人でも多くのレスリング希望者を募っていただくようにお骨折りをお願いする次第であります」と括られている。やっと目鼻が付きだした「関大レスリング部」も、一進一退のマンネリ状態を打破するためには、特効薬的な戦略が必要である。既に当時（昭和50年以降から）の大学レスリングは相対的な意味において「質」が高くなってきていて、その対応として、大学から始めたレスラーでは限界があったし、さらに不確定な少数部員では太刀打ちできない状態であった。端的に言って「関大レスリング」の競技力向上のためには、道は二つしかない。

▷ 一高レスリングの復活を図る。

▷ 「体育推薦制度」の復活を待つ。

後者は学内動向の興隆をまたなければならぬ。前者は働きかけが成功すれば、可能である。前出の「懇談会」は、この前者の可能性を打診するために開かれたのであった。そして「脈」を握り取ることができた。その「顛末」については後述することになる。

3月12日、関西大学体育OB会総会が、新阪急ホテルで開催されている。松井清新会長は次のように挨拶を結んだ。

……関西大学はみなさんもお存じのように、関西の名門校であります。昔の関大のような文武両道に優れた関西大学に変身するように大学当局といろいろと交渉してまいりたい。学問とスポーツの両方を兼ね備えた「大学」こそが、

これからの社会では、名門校であると再評価されることになるかと信じておりますので、現在の関西大学に不足しているスポーツ振興を目指して、「スポーツ推薦制度」の復活を認めていただけるように、粘り強く要請していく所存であります……。（総会「会長挨拶」）



写真▷松井（ゼッケン110）・大島（1000）・北尾（119）さんが関大体育OB会の育ての親

いうまでもなく関西大学体育OB会の歴代会長は、あの大学紛争を契機にして廃止となった「体育推薦入学制度」の復活について、体育OB会の総意をうけて、働きかけつづけてきた。だがこの時点での関西大学状況は、紛争後遺症の作用で一向に進展する気配はなかった。だからこそ、打開策のためには、「関大一高」に我が部の視点が注がれたのである。

さらに関西大学総体としては、「関西大学創立100周年」を来年の11月4日に迎えることになっていて、慶賀ムードがただよっていた。しかし、我が部は、やはり「一進一退」である。

沖本主将、樋口副将、海野主務、宮崎、渡辺の率いる昭和60年度のチームは、春季リーグ戦1部最下位で、入れ替え戦で負けて、2部へ転落している。駒不足が最大原因である。秋には2部で優

勝したものの、入れ替え戦で「関大4-⑤名商大」と惜敗して、復帰を果たすことができなかった。この年の藤田監督の所感が考えさせてくれる。

◇

世の中を見渡せば、21世紀計画が着々と進み、街は活況を呈している。我が関西大学も創立百周年の年を迎え、確実に新たな次の時代が訪れようとしている。にもかかわらず、現在のレスリング部は、大きな壁に阻まれて、その時流に乗ることができずにいるのである。

コンピュータ文明の時代に至り、機械が人間にとって代わろうとする「進歩?」のなかにおいて、なお太古の昔より、人間同士が各自の知力と体力で、裸でぶつかりあうのがレスリングである。機械に頼らず、道具を用いず、己ひとりで決断し、相手を振じ伏せるのがレスリングである。

この単純明快な人間の闘う姿が理解できていな

かったのだ。それは、関大レスリングのなかにおいて、監督の何たるかを、また選手の何たるかが、わかっていなかったのだともいえよう。私自身この問題の答えを見いだすのに、絶好の機会を、いま与えられていると思う。これからの1年は、転換の始まり、感覚の変革をする必要に迫られていると思う。ちょっと遅くもあるが、私自身、至福の経験ができたと言えるように、人生の修養をしたいと思う。あせらずに、根気をもって、謙虚に、そして大胆な決断力を発揮しながら、発想と感覚の転換をはかってみたいと思う。選手諸君に対してというよりも、私自身のために、私自身の新たな発見のために……。(「OB会誌」)

◇

この藤田「告白」をどう受けとめるのか。誰にでも通ずる味のある「告白」ではないか。

(完)



写真▷第1グラウンド顕彰碑・昭和60年建立

創立百周年を記念する事業の第1は、関大第2世紀に向けて新たな飛躍のための跳躍台となるものでなければならない。……本学は周到な準備のもとに総合図書館の建設を計画し、……2年の歳月と50億の巨費を投じて59年9月に竣工。翌年4月に開館した。新しい図書館は、かつて「東洋一」を誇った第1グラウンドの南半に、地上3階地下2階、総面積2万500平方メートルの雄姿を現した。……大学図書館としてはまことに「東洋一」の名に背かぬであろう。……図書館前には、第1グラウンドの栄光の歴史を刻んだ記念碑(撰文・藤本是)が建てられた。(『関西大学百年のあゆみ』より)